資料2－3

知床エコツーリズム戦略の主要な改定事項の取扱について

１．IP における価値・ストーリーの反映

・IP で整理された「守り伝えるべき知床の価値」を基に既存戦略に記載のない価値を追加し反映する。またゾーニングにおいても場ごとに紐づく価値を記載する。
・IP で整理した価値を伝える「ストーリー」の活用については、エコツーリズムを推進する取組手法一つとして整理する。
・エコツー戦略が価値共有の基盤となるとともに、望ましい利用や体験の方向性を示す指針として機能するよう見直す。

改定案	現行
２－１．守り伝えるべき知床の価値 （１）自然と生命に関する価値 知床は、流氷が来遊する北半球南限に位置し、流氷がもたらす豊かな海洋環境と、海岸から高山帯まで連続的に残された原生的な陸域の自然環境とが、河川を通じて密接に結び付いた生態系を有している。この海・川・森の一体的な循環により、高い生産性と生物多様性が維持されており、プランクトンから魚類、海鳥、海棲哺乳類、大型陸上動物に至る多様な生物群集が成立している。また、サケ類の遡上に象徴されるように、海と陸をつなぐ物質とエネルギーの循環が現在も自然状態で機能しており、ヒグマ、エゾシカ、オオワシなどの大型野生動物や希少種を含む豊かな動物群集が見られることは、知床を特徴づける重要な価値である。 このような原生的な自然環境は、人為の影響が比較的少ない「ありのままの自然」が広域に残されている点において極めて貴重であり、人類にとって不可欠な自然の姿を体感できる場でもある。さらに、ヒグマやシャチ等の食物連鎖の頂点に立つ生物の存在や原生的な自然の中に身を置くことは、生命の力強さや自然の厳しさを実感させ、人間の存在の小ささや自然への畏敬の念を喚起する体験的価値を有している。 （２）地形と景観に関する価値	７．守るべき知床の価値 （１）自然に関する価値 知床では、北半球南限の流氷に代表される豊かな海域の自然と海岸から高山まで一体で残された原生的な陸域の自然が、川や生物を通じて相互に循環する独特の生態系を見つめ、体感できる。また、ここに息づく生物群集の多様性や大型野生動物や希少な生物の営みも、他では見ることのできない知床におけるエコツーリズムの価値である。代表的なものとして次のようなものがあげられる。 ○火山活動や浸食により作られた複雑で険しい地形、数々の滝、温泉、噴気孔などから垣間見ることのできる地球の活動と自然美 ○浅海域から稜線までの多様な植生の垂直分布、固有種や絶滅危惧種を含む独特の海 岸植物、湿原植物、高山植物 ○クリオネからマッコウクジラまで、植物・動物性プランクトン、海藻、魚類、海鳥、鰭脚類、鯨類と多くの生物が息づく北半球の海氷の南限に見られる豊かな海洋生物相 ○シロザケ、カラフトマス、オショロコマが自然産卵を行い命の循環が見られる河川 ○豊穣の海・川・森に支えられた原生的な動物群集、自然本来の動物群集、ヒグマ、エゾシカ、オジロワシ、シマフクロウなどの大型野生動物や希少生物

知床半島は、火山活動とそれに伴う隆起および浸食により形成された知床連山を骨格とし、急峻で複雑な地形や断崖、多数の滝、温泉などが分布し、地球の活動を現在進行形で感じることができる景観が広がっている。また、海岸から山岳に至るまでの空間が一体として保全されていることにより、海域と原生的な森林・山岳景観が連続する、ダイナミックで独特な自然景観が形成されている。さらに、急峻な地形や厳しい気象条件（強風等）は、自然環境の厳しさと壮大さを際立たせる重要な要素となっている。加えて、人工物や人工光の影響が少ないことにより、静寂性や広大なスケール感、秘境性が維持されており、訪問者に非日常的な体験と強い印象を与える重要な資源である。 （３）歴史と文化 知床には、縄文時代以降の遺跡やオホーツク文化のチャシ跡など、人間の営みの歴史を示す多様な文化的資産が残されており、長期にわたる人と自然との関わりが見られる。またアイヌ文化を今に伝える地名や伝承も残されている。 近代以降においては、農業開拓や鉱山開発、漁業の発展など、人々が厳しい自然環境の中で生業を営んできた歴史があり、その痕跡は建造物や土地利用の形として現在にも残されている。 さらに、「しれとこ 100 平方メートル運動」に代表される市民参加型の自然再生の取組や野生生物との共存は、自然と向き合い続けてきた地域社会の価値を示すものである。 （４）暮らしと産業に関する価値 知床の暮らしと産業は、流氷に起因する豊かな海洋生態系の恩恵を受けたサケ・マス、スケトウダラや昆布等多様な水産資源を基盤として発展してきた。これらは高いブランド価値を有し、地域経済を支える重要な要素となっている。また、明確な四季をもつ厳しい自然条件のもと、番屋生活など季節に適応した暮らしが営まれてきた。現在	（２）人と自然の関わりについての価値知床には、自然に培われてきた人間の文化・営みが存在し、今も活動が行われている。過去の人の営みを今に伝える遺跡が数多く残されていることに知床の価値があり、また、現在自然の恵みの中で営まれた自然を育て、活用する活動が継続されていることも知床の価値である。代表的なものとして次のようなものがあげられる。 〇知床半島各地に残る縄文時代以降の各時代の竪穴式住居跡やチャシ跡等の遺構、アイヌ文化を今に伝える地名や伝承 〇近代の人々の活動の歴史を伝える農業開拓や鉱山開発の跡地に残る建物跡や近代化 遺産 〇知床連山を背景に展開される定置網、海峡を照らす漁り火、番屋や漁港の漁業の営みの風景、自然と共に生きる人々との交流 〇市民参加により本来の生態系を取り戻そうとする「しれとこ 100 平方メートル運動」の活動の姿、ヒグマなど野生生物との共存を図るための取り組み、希少種保護のための活動 （３）秘境感に根ざす非日常性から得られる価値大地の突き出たるところ（シリエトク：アイヌ語）である知床は、その自然の厳しさ、険しさが開発や利用を拒み、原生自然のフロンティアとして残された国内でも稀な地域である。その独特の雰囲気やそれらから得られる体験もエコツーリズムにおける知床ならではの重要な価値である。代表的なものとして次のようなものがあげられる。 〇人気や人工物、人工の光のない自然の広がりから得られる静寂性、孤独感、秘境感 〇奥深い自然に分け入ることで自らの技量を試し、得られる達成感、到達感 〇ヒグマが高密度に存在することにより得られる緊張感、生命感 〇遠く千島列島、カムチャッカに連なる自然を彷彿とさせる日本離れしたオホーツク圏の異国的雰囲気

においても、漁業をはじめとする地域産業や観光活動は、自然の恵みを持続的に活用する形で継続されている。 　加えて、エコツーリズムやガイド活動を通じて、来訪者は自然や文化への理解を深める機会を得ており、これらは単なる観光にとどまらない学習的・体験的価値を生み出している。 このように、知床の暮らしと産業は、自然の厳しさと恵みの双方を受け止めながら成り立っており、自然と共存する持続可能な地域社会のあり方を体現する価値を有している。	

３．ゾーニング規定の導入について

・ゾーニングは、知床国立公園利用のあり方懇談会で作成された「ゾーニングとイメージ（案)」を出発点とし、既存戦略や IP で整理された価値と統合し整理をする。
・既存の計画（国立公園の管理計画や森林生態系保護地域）との整合性を図る他、ヒグマが知床の自然体験における最大のリスクであることを鑑み、知床ヒグマ管理計画におけるゾーニングも考慮する。
・ゾーニングを前提として、利用コントロールや施設整備等の具体的方策を展開する。

４．リスクマネジメントに関する項目の方向性について

・戦略の上流部に基本方針を記載。具体的方策として、遺産管理者・地方公共団体、観光事業者といった主体ごとの取組の方針を記載。
・ゾーニングに合わせた各地域における考え方の記載も検討。

＜リスクマネジメントに関する基本方針＞

　知床は、自然そのものが最大の資源であり、自然そのものを体験・体感するようなアクティビティの充実は、同時に、自然のリスクと向き合う機会の増加も意味する。管理機関及び地域関係者による利用のルールの設定やリスク情報の発信を通じ、利用者自らが自然環境に内在する危険性を十分に認識し、自己責任の原則のもと自らの行動に配慮することで遺産価値の維持にも貢献できるよう、理解醸成に努める。

　エコツアー等の推進にあたって事業者は、実施するエコツアー等の内容に応じ、利用者に対し、安全・リスクに関する情報を事前に十分伝えるとともに、安全確保のための備えを事前に行う。